

# 風土を温める

あたた

シリーズ 高山の文化財⑥

【市指定無形民俗文化財】

## 金蔵獅子

毎年九月六日、下切町の諏訪神社と三枝神社境内で、勇壮な金蔵獅子が奉納されます。獅子舞は民俗芸能の宝庫である飛騨の中でも代表的なもので、この金蔵獅子は、国道41号線沿いの富山県南部から飛騨地方中北部にかけて見られます。

伝承地により、物語や登場人物、道具などにさまざまな違いが見られますが、共通するのは、主人公である金蔵という若者が、悪の象徴である荒れ狂う獅子を退治するという劇



獅子を退治する金蔵とおかめ

下切町の金蔵獅子は江戸時代の中ごろ、国府町金桶から伝授されたもので、現在、地元の保存会により伝承されています。演技時間は約二〇分で、笛・太鼓・摺り鉦の囃子方七名によるリズムミカルで軽快な旋律が繰り返される中、四名の演技者が

的な獅子舞であるという点です。

この芸能の発生には、伎楽（注）や野獣とのかかわりがあるという説があり、郷土史家の角竹喜登氏は、かつてこの芸能の由来を「金蔵獅子は一組の男女が協力し、獣害を除き、豊作を迎える祈念の神事である」と述べています。昔の獣害の様子は、今に残る猪垣、猪突槍、獣害除祈願の神社や山の神の狩りの習俗などからも、うかがい知ることができま

す（下図参照『斐太後風土記』）。



夜通し見張りをして獣から畑を守る人々『斐太後風土記』

以下の物語を演じます。

『獅子舞が舞っていると天狗の面をつけた金蔵が、短棒（剣）を持って獅子の進路を遮る。獅子が弱るのを見て背中に乗り移るが、獅子は金蔵を振り落とし逆襲する。おかめは、スリコギとしゃもじを打ち鳴らして獅子の気をそらし、何度か倒れた金蔵を介抱する。そのうち獅子も疲れ果て、体力が回復した金蔵は獅子の頭を短棒で打ち、格闘の末に退治する』



獅子と激しく格闘する場面



肩車をして金蔵に襲いかかる獅子

下切町の金蔵獅子では、獅子が金蔵を襲うとき、肩車をする場面があります。金蔵を上から見下ろし、今にも襲いかかろうとする獅子は、場を盛り上げるものであり、ほかではあまり見られない特有の演技です。

〈所有者〉 諏訪神社、三枝神社

〈所在地〉 下切町

〈時代〉 江戸時代以降

【見学】 神社の例祭日、九月六日に両神社にて

（注）伎楽Ⅱ古代、インド・チベット地方で発生した仮面音楽劇